大学生の「保健体育」に対する関心調査

——関連用語を通して——

藤　沢　邦　彦

A study on interest for health and physical education of students

——From viewpoint of the related words——

Kunihiko FUJISAWA

This survey was carried out for the purpose of grasping the interest for health and physical education of students in order to contribute to the reformation of health and physical education curriculum in university.

The students of the literary course were asked their interest-level as to the words (90 items) and areas (8 items) related with health and physical education. The subjects of inquiry were 892 students (male : 317, female : 575).

The results are summerized as follows ;

1. The students that have the interest in "hoken" and "taiiku" areas were very few, but those that have the interest in "taiiku-jitsugi" were not a few.
2. The students that have the interest in "sports" and "kenkou" areas were abundant, and male students that have interest in "tairyoku" and female students that have interest in "biyou" were also abundant.
3. It is necessary for reformation of health and physical education curriculum to take a care of the interest of students in health and physical education and related areas.

Key words : Health and physical education, College education, Interest

Ⅰ. 緒　論

保健体育は学校において教科として位置付けられ，また一つの学問体系としても広く知られてきた[1)3)]。しかし，体育学の発展，健康学の発展にともなって保健と体育の区別が目標論，内容論あるいは方法論として唱えられるようになった。

さらに，体育領域においてはスポーツの隆盛とともに教科名の変更や研究組織名の変更等が近年の話題である[5)]。保健領域においても，健康ブームが世に広く浸透し，保健という名称が健康にとって変わりつつある。

保健体育にとってこのような不明確な機運が見られるこの時期に，大学設置基準が改訂され，大学教育における保健体育科目の位置付けが大きく変わることになった。すなわち，従来すべての大学に於いて必修科目であった保健体育の実技および講義が，平成4年度からは各大学の自主的判断によって自由に履修させることができるようになった。現時点において（平成3年10月）すでにかなりの大学が保健体育の必修単位を削減し，他の科目と競合する形で選択の幅を広げる方針を出し始めている[注1)]。

大学における保健体育の振興を考えると，従来から指摘されているところの大学の保健体育のマンネリ化から脱却し，今や多くの学生に選択されるだけの魅力ある保健体育に変容しなければならない。ことの是非論は別として，学生の関心と適合しない科目は生き残れない状況が起きてくることは十分に予想される。

教える側の論として，教育上あるいは健康管理上等いかに立派な保健体育であっても，また大学の経営管理上の都合があったとしても，要は大学生達がいわゆる保健体育に対してどのような関心を持っているかといった学ぶ側の論が，今後の大学における保健体育の行方を左右すると考えられる[4]。

そこで，現在大学において旧設置基準による保健体育の単位を履修中の大学生に対し，保健体育全般にわたる関心調査を行い，その実態を明らかにするとともに，新設置基準下における大学保健体育の科目名や教授内容等の在り方について検討した。

II．研究方法

次のような調査を実施し，保健体育に対する大学生の関心を調べた。

1．調査対象：都内の四年制大学（共学の総合大学）3大学と短期大学（女子）2大学の学生を対象とした。これらの大学は，いずれも大学における保健体育科目の履修方法が同様である。また専攻は，予備調査において文科系と理科系学生の意識に差がなく，医科系と体育系に特異な傾向がみられたため，本報では全大学生の中で占める割合の高い文科系専攻の学生に限って調査した。

調査対象数は，四年制男子大学生合計317名，四年生女子大学生合計213名，短期大学女子大学生合計362名　総計892名である[注2]。

2．調査時期：平成3年5月

3．調査方法：質問紙法（無記名，自記式）による一斉調査

4．調査項目：保健体育に関する用語90項目（保健体育に関連する9領域から，各10項目の用語）をランダムに示し，各項目に対する関心度を四者択一（かなり関心がある，やや関心がある，あまり関心がない，全く関心がない）の形式で記入させた。以下に，調査に使った用語90項目を領域別にまとめて示す。

1）「スポーツ」領域の用語

スポーツ教室・スポーツマン・生涯スポーツ・オリンピック・スポーツドリンク・スポーツ大会・スポーツクラブ・スポーツ施設・スポーツ行政・スポーツ傷害

2）「運動」領域の用語

運動会・運動靴・運動着・運動場・運動文化・運動処方・運動能力・運動部・運動生理・運動不足

3）「体育」領域の用語

体育実技・学校体育・体育会・体育講義・体育施設・体育教師・体育の科学・社会体育・生涯体育・体育祭

4）「体力」領域の用語

体力テスト・基礎体力・防衛体力・筋力・持久力・敏捷性・柔軟性・トレーニング・体格・行動体力

5）「美容」領域の用語

美顔・美肌・痩身・脱毛・美容教室・プロポーション・美容体操・美容院・美容食・化粧品

6）「健康」領域の用語

健康診断・健康意識・健康習慣・健康情報・健康相談・健康管理・健康観・健康食品・健康教育・健康保険

7）「安全」領域の用語

安全教育・交通安全・防災訓練・救急医療・救急箱・人工呼吸・潜在危険・安全管理・労働安全・学校安全

8）「保健」領域の用語

保健の授業・保健所・保健薬・学校保健・保健器具・老人保健・母子保健・精神保健・保健指導・保健行政

9）「疾病・傷害」領域の用語

成人病・癌・脳溢血・心臓病・不慮の事故・エイズ・ノイローゼ・高血圧症・自殺・疾病意識

なお，これらの領域名および関連用語は日本体育学会の用語集案[6)7)]および高等学校の保健教科書等を参考に，大学生が用語の意味を理解できると思われる範囲で筆者が独自に選択した。領域名の選択基準は，保健体育に関連して比較的「よく使われている用語」を選択の目安とした。ただ，「美容」については調査対象の女子大学生を考慮して特に取り上げた。項目の選択基準は，それぞれの領域に関連して比較的「よく使われている」，「関心が高いと思われる」，「関心が低いと思われる」，

「類似した用語がある」用語を目安とし，調査の便宜上各々10項目に絞って取り上げた。また，類似あるいは同義と思われる用語も関心の相違をみるために，意図的に採用した*3)。

Ⅲ．結果並びに考案

保健体育に関連する用語90項目に対する，大学生の関心の実態をまず保健体育に関連する9領域別に検討し，次いで9領域間における関心の相対的順位について検討した。

なお，90項目の用語に対する関心の程度について，調査用紙では四者択一（かなり関心がある，やや関心がある，あまり関心がない，全く関心がない）の形式で調査したが，調査結果の分析・検討の段階では，かなり関心がある者とやや関心がある者をまとめて「有関心者」とした。

また，9領域間における関心順位についての調査結果の分析・検討では，関心がある領域としてあげられた順位が第1位，第2位，第3位の領域をまとめて「上位関心領域」とし，第4位～第6位の領域を「中位関心領域」，第7位～第9位を「下位関心領域」とした。

1．「スポーツ」領域に対する関心

スポーツ領域に対する関心の実態をみるため，スポーツに関連する用語10項目に対する関心の程度を調査した。表1は各項目に対して「関心がある」と答えた者が占める割合を，調査対象群別に示している。

全対象に特に関心が持たれているのは「オリンピック」であり，有関心者は全体の約8割におよんでいる。逆に関心が持たれていないのは「スポーツ行政」であり，関心のある者は僅かに全体の約3割にすぎない。スポーツ行政を除けば，全般にわたりかなり多くの者がスポーツに関心を持っているといえる。

対象別にみると，四年制大学男子が女子より関心を持っている者が多い項目は「スポーツドリンク」「スポーツ大会」「スポーツ行政」「スポーツ傷害」であり，逆に女子が男子を上回っている項目は「スポーツ教室」「スポーツマン」「スポーツクラブ」「スポーツ施設」である。四年制女子の関心は，全般に男子と女子短大生の関心の中間に位置する傾向がみられる。

2．「運動」領域に対する関心

運動領域に対する関心の実態をみるため，運動に関連する用語10項目に対する関心の程度を調査した。表2は各項目に対して「関心がある」と答えた者が占める割合を，調査対象群別に示している。

全対象に関心が持たれているのは「運動能力」と「運動不足」の項目であり，特に運動不足に関心のある者が多い。逆に関心が持たれていないのは「運動文化」「運動生理」等残りのほとんどの項目において，半数以下の者しか関心をもっていない。

対象別にみると，男子大学生は運動能力に関心を持つ者が多く，女子短大生では運動場に関心を持つ者が少なく，運動部に関心を持つ者が他より多い傾向がみられる。

3．「体育」領域に対する関心

体育領域に対する関心の実態をみるため，体育

表1　「スポーツ」領域の項目別有関心者率（%）

項目＼対象	大学男子	大学女子	短大女子
スポーツ教室	47.2	53.8	63.1
スポーツマン	59.2	69.8	71.3
生涯スポーツ	62.5	67.0	61.6
オリンピック	80.1	82.2	78.1
スポーツドリンク	64.0	57.3	57.5
スポーツ大会	60.6	56.1	50.8
スポーツクラブ	54.7	61.0	76.5
スポーツ施設	58.7	59.6	71.5
スポーツ行政	37.3	29.2	27.6
スポーツ傷害	53.2	46.0	40.6

表2　「運動」領域の項目別有関心者率（%）

項目＼対象	大学男子	大学女子	短大女子
運動会	44.0	54.7	47.5
運動靴	54.1	49.8	45.9
運動着	36.0	44.6	35.1
運動場	43.5	36.6	30.1
運動文化	35.6	25.0	27.7
運動処方	41.3	40.6	39.3
運動能力	81.7	70.0	72.6
運動部	42.0	42.7	52.5
運動生理	33.9	34.4	37.6
運動不足	81.1	86.9	85.3

に関連する用語10項目に対する関心の程度を調査した。表3は各項目に対して「関心がある」と答えた者が占める割合を，調査対象群別に示している。

全対象を通じて約7割の者に関心が持たれているのは「体育実技」だけである。体育実技に対して大学生の多くが関心をもっていることは，筑波大学における調査でも明らかになっており[2)]，体育関係者がこれからの大学体育を考えるうえで，明るい材料と言える。

一方，およそ3割以下の者しか関心を持っていないのが「体育教師」「体育の科学」「社会体育」の項目であり，「体育会」や「生涯体育」の項目でも約4割である。体育実技を除いて，残りの全項目にわたって関心を持っている者が少なく，この傾向はどの調査対象においても同様である。体育嫌いが大学生の間にかなり慢延しているものと思われる。小学校から慣れ親しんできた体育がなぜこうも嫌われてしまったのか原因は定かでないが，ともかく「体育」という語をストレートに表に出しているような科目名では敬遠されてしまうに違いない。

4．「体力」領域に対する関心

体力領域に対する関心の実態をみるため，体力に関連する用語10項目に対する関心の程度を調査した。表4は各項目に対して「関心がある」と答えた者が占める割合を，調査対象群別に示している。

全対象を通じて約8割もの者に関心が持たれているのは「基礎体力」と「体格」である。基礎体力に関心を持つ者が多いことは，運動領域において運動不足に関心を持った者が多かったことや体育実技に関心を持っている者が多いことと考え合わせると，大学生達がかなり体力の低下を意識しているのではなかろうか。また，既に成長期の末端にある大学生の多くが体格に関心を持っていることは，外見や容姿にこだわる年代であることを表しているものとおもわれる。なお，体力に関わる他の項目においても，全般にわたって関心を持っているものが比較的多い傾向にある。

対象別にみると，男子と女子の間に差がみられ，特に「筋力」「持久力」「敏捷性」「トレーニング」の項目では，男子の関心が高い傾向にある。このことから，大学体育に於いて男子のみのクラス編成では、「体力」を強調した体育が有望といえる。

表3　「体育」領域の項目別有関心者率（%）

項目＼対象	大学男子	大学女子	短大女子
体育実技	75.6	69.5	71.0
学校体育	48.9	40.8	43.7
体育会	35.1	37.1	39.8
体育講義	48.9	50.7	36.2
体育施設	58.9	53.1	55.8
体育教師	26.8	28.8	23.5
体育の科学	30.9	23.9	23.3
社会体育	26.5	23.5	23.5
生涯体育	45.4	41.5	41.2
体育祭	46.8	60.6	51.9

表4　「体力」領域の項目別有関心者率（%）

項目＼対象	大学男子	大学女子	短大女子
体力テスト	56.3	47.9	47.2
基礎体力	82.6	75.0	76.5
防衛体力	68.1	63.7	51.5
筋力	82.6	49.3	48.1
持久力	75.4	54.9	58.3
敏捷性	76.3	64.3	61.0
柔軟性	68.1	72.6	74.0
トレーニング	74.8	54.9	59.4
体格	79.1	87.8	86.7
行動体力	63.4	61.0	56.5

5．「美容」領域に対する関心

美容を保健体育に関連する領域とすることに異論もあるが，保健体育的視野からみて肯定できないような美容観は正しくないと考え，さらに美容には保健体育と合通ずる目的，内容，方法が存在すると考え，敢えて関連領域とした。

美容領域に対する関心の実態をみるため，美容に関連する用語10項目に対する関心の程度を調査した。表5は各項目に対して「関心がある」と答えた者が占める割合を，調査対象群別に示している。

全項目にわたり男女差がみられ，女子の美容に対する関心の強さが如実に表れている。男子では「痩身」に約4割の者，「プロポーション」に約5割の者が関心を持っていたが，女子では「美肌」や「プロポーション」に約9割，「美顔」や「化粧品」に約8割の者が関心を持っている。また女子

表5 「美容」領域の項目別有関心者率（%）

項目＼対象	大学男子	大学女子	短大女子
美　顔	39.7	81.7	83.1
美　肌	34.2	89.2	91.4
痩　身	40.1	77.0	77.2
脱　毛	25.6	74.2	81.8
美容教室	12.9	63.4	71.4
プロポーション	50.3	91.1	93.1
美容体操	13.2	72.3	79.0
美容院	24.7	56.1	88.4
美容食	19.6	58.2	70.7
化粧品	16.4	81.2	90.1

の場合，四年生女子と短大生の間にも明白な差がみられ、全項目において短大生の方が四年生女子より関心を持っている者が多く，とくに「美容院」「美容食」「化粧品」において顕著であった。このような結果から，女子大学生の極めて高い美容に対する関心をうまく保健体育に取り込むことができれば，大きな成果が得られるのではなかろうか。また一歩進めて，若い女性によくありがちな不健康とも思われる美容意識や行動を積極的な身体活動を通して改善するような役割も担えるであろう。

6．「健康」領域に対する関心

健康領域に対する関心の実態をみるため，健康に関連する用語10項目に対する関心の程度を調査した。表6は各項目に対して「関心がある」と答えた者が占める割合を，調査対象群別に示している。

全対象を通じて「健康意識」や「健康管理」に対して約7割の者が関心を持っており，他の項目についても全般にかなり多くの者が関心を持っている傾向がみられる。

対象別にみると，全項目にわたって男子より女子の方がやや関心を持っている者が多く，特に「健康情報」や「健康食品」において顕著である。このような結果から，大学生の「健康」に対する高い関心に，大学の保健体育が十分応えられるだけの準備とＰＲが必要であろう。設置基準改訂の作業中に国大協が提言したとされる「健康科学教育」などは案外大学生の望むところかもしれない。

7．「安全」領域に対する関心

安全領域に対する関心の実態をみるため，安全に関連する用語10項目に対する関心の程度を調査した。表7は各項目に対して「関心がある」と答えた者が占める割合を，調査対象群別に示している。

全対象を通じて「交通安全」や「救急医療」に対して関心のある者が6～70%でやや多く，「防災訓練」や「学校安全」に対して関心を持っている者は3～40%と少ない傾向がみられる。全項目とも調査対象による差はみられず，この領域は極端ではないが全般に大学生の関心が低い領域といえよう。大学生の死亡原因の第1位が不慮の事故であること等を考えると，大学教育においても等閑視できない領域であることから，取り上げ方に工夫を要する。また，この領域は専門家に任せる領域ではなく，全ての指導者が管理的にも，教育的にも実践能力が求められるところであり，その点では現在の大学保健体育の盲点の一つと云えよう。

8．「保健」領域に対する関心

表6 「健康」領域の項目別有関心者率（%）

項目＼対象	大学男子	大学女子	短大女子
健康診断	63.0	66.5	62.7
健康意識	74.1	74.4	74.5
健康習慣	65.3	71.2	66.3
健康情報	54.3	68.4	62.0
健康相談	41.1	49.8	47.8
健康管理	71.3	82.5	75.4
健康観	54.9	59.0	57.1
健康食品	53.9	67.6	74.3
健康教育	40.3	45.5	41.0
健康保険	49.8	59.7	39.5

表7 「安全」領域の項目別有関心者率（%）

項目＼対象	大学男子	大学女子	短大女子
安全教育	43.0	42.2	40.1
交通安全	70.0	69.0	60.2
防災訓練	33.4	39.2	32.0
救急医療	63.1	71.8	64.4
救急箱	41.8	54.7	45.2
人工呼吸	43.7	42.9	40.9
潜在危険	47.6	40.8	41.9
安全管理	53.3	57.1	45.6
労働安全	48.1	48.8	36.4
学校安全	33.8	40.8	37.1

表 8 「保健」領域の項目別有関心者率（%）

項目＼対象	大学男子	大学女子	短大女子
保健の授業	51.4	52.4	53.5
保健所	20.6	21.8	20.8
保健薬	38.2	48.1	41.2
学校保健	32.6	38.4	29.3
保健器具	36.7	34.3	35.4
老人保健	38.8	63.4	48.6
母子保健	21.5	67.6	64.5
精神保健	45.1	58.7	48.1
保健指導	28.8	35.4	34.3
保健行政	24.8	31.1	23.8

表 9 「疾病・傷害」領域の項目別有関心者率（%）

項目＼対象	大学男子	大学女子	短大女子
成人病	59.9	61.0	63.4
癌	66.1	77.0	65.3
脳溢血	35.6	45.1	40.0
心臓病	52.4	54.9	48.6
不慮の事故	66.5	68.1	55.5
エイズ	65.0	62.4	63.0
ノイローゼ	46.8	56.3	49.4
高血圧症	38.5	44.6	36.2
自殺	47.2	62.4	48.3
疾病意識	45.7	53.5	40.7

保健領域に対する関心の実態をみるため，保健に関連する用語10項目に対する関心の程度を調査した。表 8 は各項目に対して「関心がある」と答えた者が占める割合を，調査対象群別に示している。

全対象とも，全項目を通じて関心を持っている者が少ない傾向が顕著であり，特に「保健所」と「保健行政」に対しては約 2 割余の者しか関心を持っていない。これは大学生は小学校以来保健教育を受けてきたとはいえ，保健という言葉の社会での使われ方が未だに曖昧であるが故に無関心になっているのではなかろうか。

対象別にみると，「母子保健」の項目では男女差が明確に表れており，女子の教育においては不可欠の教育内容といえよう。また四年制大学女子の場合「老人保健」や「精神保健」の項目において，他の対象より関心を持っている者が多い傾向がみられる。

保健体育の一翼を担う保健が，大学生にとってこうも関心の持てない領域であることは，この言葉を表に出した教育は困難であると云えよう。

9．「疾病・傷害」領域に対する関心

疾病・傷害領域に対する関心の実態をみるため，疾病・傷害に関連する用語10項目に対する関心の程度を調査した。表 9 は各項目に対して「関心がある」と答えた者が占める割合を，調査対象群別に示している。

全対象とも，健康な大学生としては全般的に関心を持っている者が少なくない傾向がみられるが，対象別にみると特徴的である。すなわち四年制大学女子では「癌」「不慮の事故」「ノイローゼ」「自殺」「疾病意識」の項目において，関心を持っている者が他の対象より多い。一方男子と短大女子はこの領域の場合非常に類似した傾向にあり，全般にわたって四年制女子より関心を持っている者が少ない。このような関心の状況を作りだした原因は明らかではないが，「エイズ」や「癌」等の具体的な疾病をテーマにした教育が受け入れられる可能性を示していると云えよう。

10．領域間における関心の順位

保健体育に関連する 9 領域の各々についての大学生の関心は前述の通りであるが，9 領域相互間での関心の状況について，関心のある順に番号をつけさせて調査した。

表10はその結果をまとめたものである。

「スポーツ」領域をみると，大学生男子の場合，61.2%の者がスポーツを関心順位の上位（第 1 位，2 位，3 位）にあげており，25.9%の者が中位の順（第 4 ～第 6 位）であり，そして12.9%の者が下位の順位をあげて他の領域より関心が低いことを示している。同様に四年制大学女子および短大女子をみても，A群（関心順位上位群）が最も多く，次いでB群，C群の順になっている。この傾向はスポーツが 9 領域の中でも関心の高い領域であることを表している。なお，スピアマンの順位相関係数（以下相関係数とする）をみると，3 対象間で0.75～0.883である。

「運動」領域では，いずれの調査対象ともB群（関心順位中位群）が最も多数を占めており，必ずしもと大学生に関心がある領域とは云えないことを示している。相関係数は男子と四年制女子間で0.2，男子と短大女子間で0.773とばらつきがあ

表10　領域間関心順位

・A群：関心上位群（関心順位１～３位合計）
・B群：関心中位群（関心順位４～６位合計）
・C群：関心下位群（関心順位７～９位合計）

(%)

領　域		A群	B群	C群
スポーツ	大学男	61.2	25.9	12.9
	大学女	43.2	34.7	22.1
	短大女	55.0	30.7	14.4
運　動	大学男	36.0	44.2	19.9
	大学女	15.0	45.5	39.4
	短大女	23.5	50.3	26.2
体　育	大学男	7.3	36.9	55.8
	大学女	1.4	23.9	74.6
	短大女	3.0	26.2	70.7
体　力	大学男	60.9	34.4	4.7
	大学女	37.1	48.4	14.6
	短大女	27.6	55.8	16.6
美　容	大学男	10.1	19.2	70.7
	大学女	67.1	24.4	8.5
	短大女	79.0	13.8	7.2
健　康	大学男	59.3	34.4	6.3
	大学女	83.1	14.1	2.8
	短大女	74.3	22.9	2.8
安　全	大学男	35.0	43.8	21.1
	大学女	26.8	44.1	29.1
	短大女	16.3	47.0	36.7
保　健	大学男	9.5	27.8	62.8
	大学女	4.7	33.8	61.5
	短大女	8.8	25.7	65.5
疾病・傷害	大学男	21.1	33.4	45.4
	大学女	21.6	31.5	46.9
	短大女	12.4	27.6	59.9

（調査数：大学男317名，大学女213名，短大女362名）

った。

「体育」領域では，いずれの調査対象ともC群（関心順位下位群）が大多数を占めており，この領域に対する大学生の関心は絶望的であると云えよう。相関係数は３対象間で0.895～0.966であり，かなり一致している。

「体力」領域では，男子の場合はA群が最も多く，次いでB群，C群であり，スポーツと同様に関心の高い者が多い。しかし，女子の場合はB群が最も多く，この領域に対する関心が高いとは必ずしも云えない。相関係数は男子と短大女子間で0.483，四年制女子と短大女子間で0.9とばらつきがある。

「美容」領域では，男子はC群が最も多くこの領域に関心を持っていない者が多い。一方女子は両対象とも，A群の者が最も多く，明らかに関心の高い領域であることがわかる。相関係数は男子と短大女子の間に－0.85の逆相関がみられ，女子の２対象間では0.945である。

「健康」領域では，全対象ともA群が最も多く，次いでB群，C群であり，この領域に対する関心の高さが表れている。相関係数は３対象間で0.925～0.975であり，非常に一致している。

「安全」領域では，全対象ともB群が最も多く，大学生にとってはあまり関心の高い領域ではないことが表れている。相関係数は３対象間で0.533～0.637でばらつきがある。

「保健」領域では，全対象ともC群が最も多く，前述の体育と並んで，全く絶望的に関心が持たれていないことを示している。相関係数は３対象間で0.845～0.979でかなり一致している。

「疾病・傷害」領域では，全対象ともC群が最も多く，次いでB群，A群であり，典型的な関心の持たれないパターンを示している。相関係数は３対象間で0.7～0.925である。

以上のような結果をさらに，各調査対象別に，A群の占める割合の高い順に９領域を並べてみると次のようになる。

［大学男子の場合］
①スポーツ　②体力　③健康　④運動　⑤安全　⑥疾病・傷害・⑦美容　⑧保健　⑨体育

［大学女子の場合］
①健康　②美容　③スポーツ　④体力　⑤安全　⑥疾病・傷害　⑦運動　⑧保健　⑨体育

［短大女子の場合］
①美容　②健康　③スポーツ　④体力　⑤運動　⑥安全　⑦疾病・傷害　⑧保健　⑨体育

このような関心の順位と前述の項目別関心度の関係を見較べると，僅かな幾つかの項目を除いて（例えば，「体育」領域の関心順位は低いが体育実技には関心を持っている者が多い等），極めて一致した関係にあることがわかる。

保健体育に関わる大学生の関心が，大学における保健体育の在り方を決めてしまうとは思わないが，少なくとも教育は学習者のやる気なしには成立しないことを考えると，本調査の結果からわかるように，大学生に最も関心の持たれていない「保健」や「体育」の名称を科目名や講義名に用いることは適切ではないと考える。なお，大学生の性別，四年制・短大別等の属性によってかなり関心に差がみられるので，カリキュラムの改革を進める際には事前に十分な調査が必要であろう。また，総合科目化をはかる場合でも，独自性を強調するあまり，旧来の用語にこだわることは得策ではないと思われる[注4)]。

Ⅳ．結　論

大学における保健体育の改革に寄与するため，保健体育に対する大学生の関心の実態を関連した用語を通して調査した。

その結果，以下のようなことが明らかになった。

1．「保健」および「体育」領域に対して関心を持っている者は非常に少ないが，体育実技に関心を持っている者は少なくなかった。
2．「スポーツ」および「健康」領域に関心を持っている者が全般に多かった。さらに男子は「体力」，女子は「美容」に関心を持っている者が多かった。
3．大学における保健体育の在り方を考える場合，関連領域に対する大学生の関心を配慮すべきであり，とくに彼らの性別や四年制・短大別等の属性によって関心の実態が異なることに留意する必要がある。

注

注１）保健体育の単位を現在の４単位必修から２単位必修に変更したり，保健体育理論をなくして実技のみに変更したり，あるいは全く必修でなくしてしまったり等々の案が幾つかの大学から紹介されているが，人事問題やカリキュラム編成上の問題などがあって，具体的に方針が確定し，公表している大学はまだ見当らない。

注２）女子の調査対象が多いのは，調査内容との関連からである。すなわち，女子大学生に関心が高いと思われる「美容」を，保健体育に活用できるのではないかとの考えによる。

注３）新設置基準に対応して，保健体育が一般教育の中に新たな授業科目を設ける場合，類似あるいは同義の用語に対する関心の様子がわかることは，適切な用語選択の材料になる。また，授業内容等の決定においても，大学生の関心を配慮すべきである。

注４）大学によっては保健体育の理論を実技と切り離して，総合科要に組み入れているが，新設置基準に対応した新たに同様の扱いをする大学が出てくると思われる。例えば，「保健」や「体育」の用語に換えて，「健康」や「スポーツ」といった用語を使い，生涯健康や生涯スポーツを指向するような授業科目名をつければ，学生のニードに応えられるのではなかろうか。

参　考　文　献

1）東龍太郎他（1957）：（編）今村嘉雄他「保健体育学体系」．中山書店，東京．
2）江田昌佑他(1986)：正課体育４年間履修に対する筑波大学生の意識．大学体育研究（筑波大学体育センター）８：91-119．
3）福田邦三他（1961）：（編）日本体育学会「保健・体育学講座」．体育の科学社，東京．
4）喜多村和之(1991)：大学教育再考―一般教育と専門教育の原点．(編) 日本体育学会体育原理専門分科会「大学教育改革と保健体育の未来像―大学体育改革のための必読資料―」，不昧堂出版．東京，ｐ．25．
5）小林寛道（1989)：日本体育学会の将来へ向けて．体育の科学39：679．
6）日本体育学会学術用語標準化特別委員会(1982)：体育学関係学術用語集案―採録編―．日本体育学会，東京．
7）日本体育学会学術用語標準化特別委員会(1983)：体育学関係学術用語集案―採録編―(追加分)．日本体育学会，東京．